The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「勧誘」の言語行動についての日中対照研究 : 被勧誘者の言語行動を中心として
Author(s)	劉, 丹丹
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　劉　丹丹　　）	
論文題名	「勧誘」の言語行動についての日中対照研究 ―被勧誘者の言語行動を中心として―

論文内容の要旨

本研究の目的は、日中の勧誘会話を対照し、日中の勧誘会話の構造と発話連鎖の特徴、被勧誘者の勧誘内容への興味の有無による被勧誘者の言語行動の違い、日中の対人配慮の仕方の違いを明確にすることである。

勧誘は日常生活において頻繁に行われる言語行動で、他人との関係を一歩縮める良い方法であるが、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者との間で誤解や摩擦が生じやすい言語行動の一つとも言える。中国語を母語とする日本語学習者は、日本語母語話者が行くかどうかをはっきり言わず、あいまいだと感じ、逆に、日本語母語話者は学習者の勧誘に押しつけがましさを感じることもある。その原因は、日中の両言語において、社会的な規範や対人配慮の仕方など、様々な面で違いがあるためではないかと考えられる。

これまでの研究は勧誘者の言語行動に注目することが多く、被勧誘者の言語行動、例えば、被勧誘者が勧誘内容に興味があるかどうかによりどのような言語行動を行うか、その言語行動にどのような特徴が見られるか、などについての研究が少ない。また、これまでの研究により日中の勧誘会話の相違点が解明されつつあるが、その日中に違いが見られる一つの要因である日中の配慮の仕方について論じる先行研究は少ない。本研究では、被勧誘者が勧誘内容への有無による日中の被勧誘者の言語行動、日中の勧誘会話における勧誘者と被勧誘者がお互いに対する配慮の仕方についても考察する。

本研究では、ロールプレイを用いて、日中の18歳～27歳の、同等で、実際に親しい関係にある女性同士を調査対象とした。被勧誘者が勧誘内容に興味がある場面①と興味がない場面②という2つの場面を設定し、勧誘を承諾するか拒否するかは調査協力者に委ねた。日中両言語において、興味がある場面と興味がない場面10組ずつのデータを録音し、合計40組のデータを収集し、分析を行った。

分析した結果、日中の勧誘会話における勧誘者の勧誘の仕方や、被勧誘者の勧誘内容への興味の有無による対応の特徴、日中の勧誘会話の展開及び発話連鎖の使用には大きな違いが見られた。これまで、漠然と捉えられていた勧誘に関する中国語を母語とする日本語学習者と日本語話者の誤解の原因は、本稿の分析によって具体的に説明することができるようになった。

日本語母語話者が中国語母語の日本語学習者の勧誘に押しつけがましさを感じるのは、中国語では、被勧誘者が勧誘内容に興味があるかどうかに関わらず、勧誘者が早い段階で【勧誘】の発話を発したり、被勧誘者が勧誘内容について積極的に【情報要求】をしたりして、相手に積極的に働きかけ、相手との親しみを示して相手のポジティブ・フェイスを配慮しているからである。

また、中国語母語の日本語学習者が、日本母語話者が行くかどうかかっきり言わないと感じ、イライラするのは、日本語では、勧誘者が勧誘内容について様々な【情報提供】をし、相手に負担をかけないように勧誘を行ったり、被勧誘者が勧誘内容に興味があるかどうかに関わらず頻繁に【あいづち】を打ち、相手に協力的な姿勢したりして、お互いのネガティブ・フェイスに配慮しているからである。また、日本語母語話者が実質的な発話だけでなく、【あいづち】を使い分けることによって自分の興味の有無を示していることについても中国語を母語とする日本語学習者は注意を払っていない可能性がある。

中国語母語の日本語学習者が日本語母語話者との勧誘会話を順調に進めるには、日中の勧誘会話の構造や、あいづちの使用、配慮の仕方などを理解する上で、お互いのルールを理解し、尊重することが必要である。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　劉　丹丹　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	鈴木　睦
	副 査	教授	杉村　博文
	副 査	教授	筒井　佐代
	副 査	教授	真嶋　潤子
	副 査	教授	中田　一志

論文審査の結果の要旨

劉氏の論文は、人と人が親しくなるために重要な役割を果たす「勧誘」という言語行動を取り上げたものである。劉氏の論文は、中国語を母語とする日本語学習者が日本語の「勧誘」において、日本語母語話者が行くかどうかはっきり言わず曖昧だと感じ、また逆に日本語母語話者が中国語を母語とする日本語学習者の勧誘におしつけがましさを感じることがあるという点に着目し、日中の「勧誘」における言語行動の異同を明らかにすることにより、日本語教育に新しい知見をもたらそうとするものである。

先行研究により、「勧誘」という言語行動に影響を与える要素として、勧誘者と被勧誘者の上下関係、親疎関係、また勧誘される内容が今ここで行われる行動であるのか、将来の行動であるのか等が指摘されている。この論文では、大阪と大連において実際に親しい女子大生の友人同士のペアを被験者として計４０組を選び、慎重に要素を統制した上で後日行われる行動についての勧誘についてロールプレイによるデータを収集している。

分析は談話構造、発話連鎖の特徴、被勧誘者の「勧誘」の内容への興味の有無による言語行動の違い、日中の対人配慮の違いの順に行われ、特にあいづちと被勧誘者の丁寧さへの配慮について注目している。分析の結果、論文の要旨に示されている通り、様々な異同が観察された。

劉氏が示した結論は、「日本語母語話者が中国語を母語とする日本語学習者の勧誘に押しつけがましさを感じるのは、中国語では、被勧誘者が勧誘内容に興味があるかどうかにかかわらず、勧誘者が早い段階で【勧誘】の発話を発したり、被勧誘者が勧誘内容について積極的に【情報要求】をしたりして、相手に積極的に働きかけ、親しみを示すことで相手のポジティブ・フェイスに配慮しているからである。また、中国語を母語とする日本語学習者が、日本語母語話者の勧誘に対して承諾するかはっきり言わないと感じイライラするのは、日本語では勧誘者が勧誘の内容について様々な【情報提供】をし、相手の反応を見ながら相手に負担をかけないように勧誘を行ったり、被勧誘者が勧誘の内容に興味があるかどうかにかかわらず頻繁に【あいづち】を打ち、相手に協力的な姿勢を見せたりして、お互いのネガティブ・フェイスに配慮していることを理解していないからである。また、日本語母語話者が実質的な発話だけでなく、【あいづち】を使い分けることによって、興味の有無を示していることについても中国語を母語とする日本語学習者は注意を払っていない可能性がある。」というものである。

劉氏の論文は限定された条件下の調査による分析であるが、結論として述べられた特徴は、日中の「勧誘」という言語行動全体に一般化することの可能なもので高く評価できる。審査委員から、今後は両言語において勧誘者が興味のない相手をどのように説得していくか等の動的な側面についても更に研究を続けてほしいという意見が述べられた。論文は明快な日本語で書かれており、用いられた図や表も効果的でよく整備されている。

以上の結果から、博士（日本語・日本文化）を授与されるにふさわしい論文と判断し、審査委員全員一致して合格とした。

以上